

「今年こそは」

桜町小・4 鈴沖 凌盛

ぼくは、一年生のとちゅうから、ピアノを習っています。ピアノをひける人は、頭がいいというイメージがあつたので、始めてみたけれど、ぼくはというと…。

初めてコンクールに出たのは、二年生の時です。予選は通かしたものの、本選では入賞できず、くやしい思いをしました。この時は、強弱が少なく、気持ちがかもつていないえんそうになってしまいました。三年生で出場した時は曲もむずかしく、強弱や記号に氣をとられ、右手と左手のかけ合いのおもしろさを伝えることができませんでした。そんなことを考えていると、ぼくと同じ年の男の子が、まるで音楽が生きているかと思うほど、生き生きとしたえんそうをしていて、ぼくの心がざわざわとしました。この時から、ぼくは不足している強弱や、表げんのくふうはもちろん、ピアノの一部分になつて、曲のよさを伝えていくことを中心に努力していこうと心に決めました。

今回は、「やくそく」という曲を練習しました。初めて聞いた時は明るく楽しそうな曲だなと思いました。速い曲なので、指が上手く動かずくじけそうになつて、練習をさぼろうと思つたこともありましたが、でも、お母さんに、「じろり」とにらまれ、しぶしぶ練習する日もありました。少しなれてきて思うようにひけず、くやしくて時間をわすれるほど、くり返し練習した時もありました。ピアノ

教室の先生に、

「スタッカートは、しずくが、ピチャン、ピチャンとはねるようにひき、アクセントは、ねんをぐにやっとおしこむようなイメージでひくといいよ。」

とアドバイスをいただきました。今までのぼくのえんそうは、いやだな、いきたくないなと思う「やくそく」だったけれど、先生のアドバイスのおかげで、楽しみでわくわくする「やくそく」にかわつたと感じ、楽しい気持ちでひけるようになりました。

それからも練習を毎日していくうちに、音楽に気持ちをこめると自然と体がついていく感覚がありました。これが「表げんする」ということではないかと気づきました。ヤマハのグレード試験に取り組んださいには、表げん力に満点をつけてもらい自信もつきました。

いよいよコンクール本番です。ぶ台そでにい動しました。心ぞうの音がどんどん大きくなり、体もふるえ、全身が心ぞうになったかと思うほどドキドキしました。ピアノをひく前に、注意することを思い出し、一つ一つていねいに心をこめてけんぱんをおしました。あつという間にひき終わり、やりきったぞと思いました。ぼくは、「今までで一番うまくひけたよ。」

と、お母さんに言ったら、

「よくがんばってたね。」

と、にこにこしながら言ってくれました。客席では、お父さんが、「とてもうまかったよ。」

と、やさしく言ってくれました。

ついに、結果発表です。

（入賞できるかな。）

ぼくは、ゴクリとつばを飲み、こわくてにげ出したい気持ちになりました。入賞した子の名前が、ゆつくりとよばれていきました。ぼくの名前はなかなかよばれません。

(今年もダメだったか…)

悲しい気持ちになりました。でも、自分の力を出し切れたから泣かないと決めました。その時、

「銅賞、鈴木凌盛君。」

と、係の人の声が聞こえました。

「えっ…。」

聞きまちがいかと思って、かたまっていました。お母さんとお父さんがびつくりして、バシバシと、ぼくのせ中をたたいてきたので、やっと自分のことだと気づきました。ぶ台に上がるとお母さんとお父さんが泣いているのが見えました。ぼくも泣きそうになったけれど、なみだを必死にこらえました。客席にもどると、お母さんもお父さんも、

「泣いてないよ」

と、ごまかしていたけれど、ぼくはちゃんと見ていたぞ。

二年間、くやしい思いをしたけど、毎日練習してあきらめなかったから、今回の結果がとれました。変わることができたのは、曲のよさを伝えたいという気持ちだが、わいてきたからだと思います。自分一人の力ではなく、練習に毎日付き合ってくれた、お母さん。ずっと、おうえんしてくれていた、お父さん。とても勉強になるアドバイスをたくさんしてくれた、ピアノ教室の先生。みんなのおかげで、すごい賞を取ることができました。

銅賞をとった思い出は、一生わすれません。そして、今回学んだ

ことをこれからの日々の生活にも生かしていきたいです。